令和２年度　「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究　研究報告書

令和３年４月３０日現在

研究課題名	ロシア帝国とイギリス帝国の仏教徒による越境的交流に関する研究	
申請者	氏名	所属機関・職
	井上　岳彦	北海道大学大学院文学研究院・専門研究員

研究成果の概要

ロシア帝国臣民によるアジアでの活動は、これまで中東、中央アジア、南アジア、東アジアを中心に研究されてきたが、Karen A. Snow (2012）などの研究によって、東南アジアでの活動状況も検証されつつある。そこでは、国際公共財（定期航路、電信網）を利用し、アジア仏教圏（東アジア、東南アジア、南アジア）で、横断的に活動するロシア系仏教徒と、その他のアジアの仏教徒の関係が次第に明らかになりつつある。

本年度の研究では、インド学者のイヴァン・P・ミナエフによるアジア旅行と、英領インド・セイロンでのロシア正教会の布教活動について調査した。その結果、アジア仏教徒知識人とロシア正教会のあいだには交流関係があり、ロシア帝国の南アジア・東南アジア進出において少なからぬ影響を与えていた可能性が見いだされた。今後、ロシアの公文書館史料を用いて、更なる調査・研究が必要であることが判明した。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書　等）※謝辞の有無について明記願います。

・（図書・分担執筆）シンジルト・地田徹朗編著『牧畜を人文学する』名古屋外国語大学、2021 年 3 月（担当範囲：pp. 48-65 井上岳彦「ロシアの牧畜民はなぜ魚も好むのか？定住化と生存戦略」）（謝辞無）

・（会議録）S. チョローン、ホルチャ、A. A. ボリソフ、岡洋樹、堀内香里編『ユーラシア遊牧民の歴史的道程』2021 年 3 月（担当範囲：pp. 157-163 Такэхико Иноуэ, «Оценки к Зая Пандита Намкай Гьямцо в Калмыкии в имперском периоде и в советском периоде»）（謝辞無）

・（研究発表）井上岳彦「2 つの教団、2 つの身分：帝政期カルムィク社会の統治構造」第 14 回近代ユーラシア比較法制史研究会、オンライン会議、2020 年 6 月 27 日（招待有）（謝辞無）

・（研究発表）井上岳彦「バルト海に生まれビルマに死す：僧侶カール・テニッソン（1883-1962）の生涯」第 5 回『楽平家オンラインサロン』（主宰：田村克己）、オンライン会議、2020 年 12 月 9 日（招待有）（謝辞無）

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。